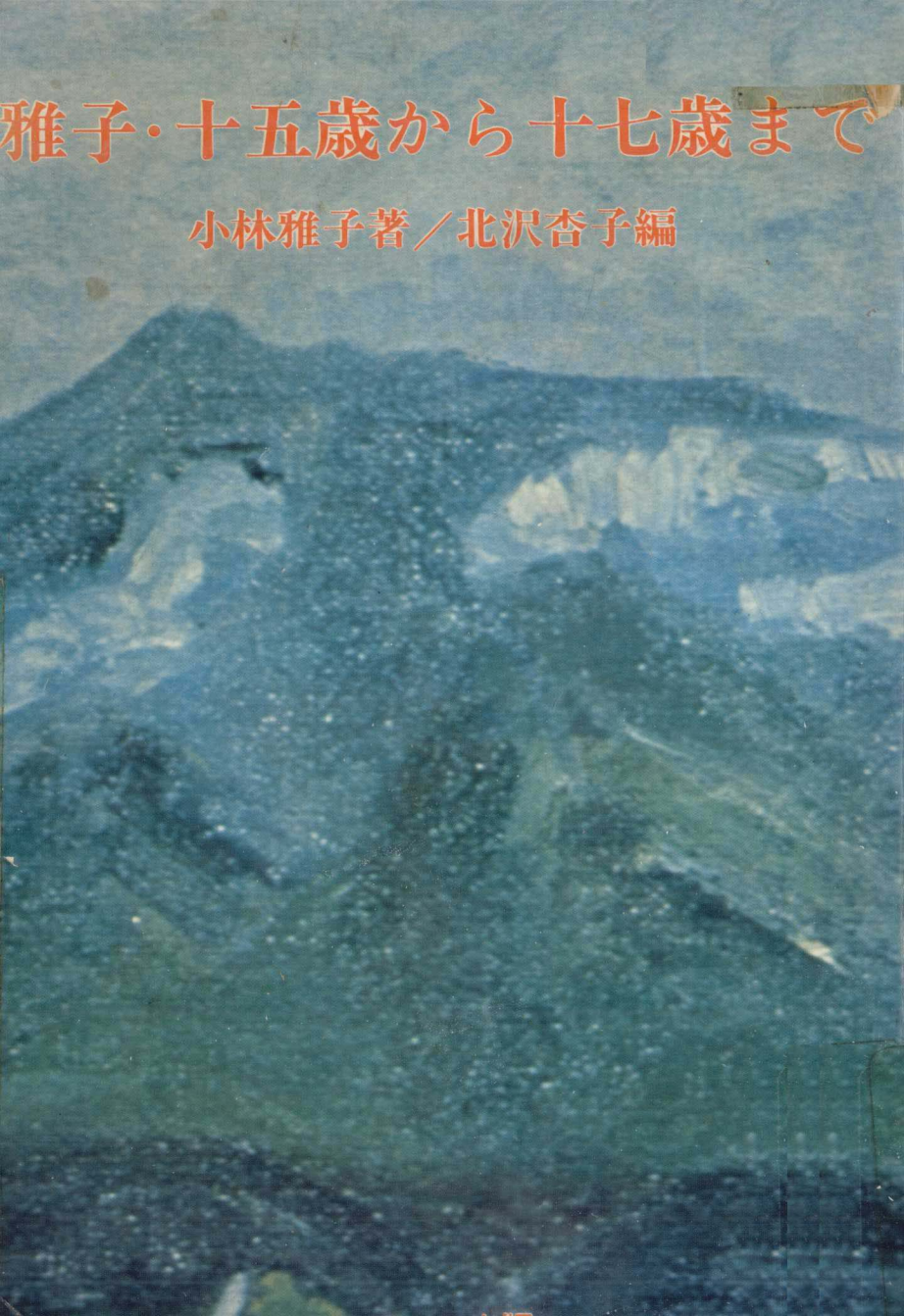
雅子・十五歳から十七歳まで

小林雅子著／北沢杏子編



小林雅子著
北沢杏子編

雅子・十五歳から十七歳まで

アーニ出版

雅子・十五歳から十七歳まで

昭和五十年三月一日第一刷発行
定価六八〇円

著者　小林雅子
編者　北沢杏子
発行所　アーニ出版
東京都世田谷区上用賀四―三一―十三
電話　東京　四二五―三一一四六

印刷・製本　合同印刷株式会社

万一落丁乱丁の際にはお取替えいたします

© 1975 Masako Kobayashi／Kyoko Kitazawa
Printed in Japan.

雅子・十五歳から十七歳まで／目次

第一章　健康な日々……3
第二章　入　院……57
第三章　退　院……135
第四章　再入院……201
第五章　筆談　会話……235
この本を読んで下さった方々へ　小林憲子……266
編者あとがき……280

雅子・十五歳から十七歳まで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「雅子・十五才から十七才まで」は、ある日突然、急性骨髄性白血病と診断された少女の、実際の日記を編集したものである。

白血病は、十万人に三人という確率で発病する血液病で、現在全国で四千人から五千人の患者がいるという。しかし、いまの医学では治癒(ちゆ)は不可能であり、発病すれば、僅かの期間、その死期を延ばす手当しか出来ない。

「青年は老年よりずっと孤独だ」という言葉がある。この白血病の少女が、むしろ青年であるが故の孤独感に、健気にも、毅然とたち向っている様子には痛ましいものがある。発病から終焉までの一年四カ月、病いの渦中にあってもなお、徹底した自己へのきびしさと他人への寛大さを貫こうとして悩み苦しんだ、この十五才から十七才までの日記は、同じ年代の若い読者に、何らかの感動と示唆を与えずにはおかないだろう。ともすれば無気力な逃避行を試み、自己の生きざまを見据えようとしない若い世代に、是非読んで貰いたいというねがいからこの本を編集した。

編者　北沢　杏子

第一章　健康な日々

私は、運命の神に誓います。
私は、自分に正直に生きます。
私は、自分に素直に生きます。
私は、運命の神に誓います。

昭和四十六年一月一日

私は、今年になって、気の休まる時がありません。毎日毎日が、あっという間に過ぎていってしまいます。そのせいか、いつも気がいらいらしていて、猫にまでもあたりちらす始末です。これからは気を落ちつかせて、一日一日をしっかりと過したいと思います。高校入試、負けたくない。勝負をするなら勝て！

地球は廻っている
その中に　山があり　海がある
なぜ　山はあるのだろうか

地球は廻っているのに
なぜ　私達には感じないのだろうか

雨

雨が降っている
きょうの雨はいつもの雨とちがう
ガラリと窓をあけた
桑畑
雨の粒が葉に落ちる
葉に落ちる雨は音がしない
家の屋根はトタンだ
雨が降ればすぐわかる
ポタン、ポタン
ほら、また雨が降ってきたんだ
葉っぱに降る雨が流れ落ちる

ちきしょう

ちきしょう
ちきしょう
いま口に出るのは
この言葉ばかりなり
なぜあんな問題が
あったのやろうか
あたまにくるよ

友だち

口をあけて笑っている友
あの人はいつも笑っている
とぼけている友
テストの時も　いつもおとぼけ
キザな友
なにかというと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

むずかしい言葉を使い
むずかしい本を読む
落ち着いた友
地震が来ても驚かない
いろんな人がいるけれど
クラスという団体には
こんな人がきっと一人はいなければ
なりたたない
だからこそ
面白いんだぜ

ねこ

ピー　ピー　どこにいるのだろうか
今ごろ何して　いるのだろうか
死んじゃったのだろうか
生きているのだろうか

保健所につれていかれたのだろうか
車にひかれちゃったのだろうか
それとも　まだ家の廻りを
さまよっているのだろうか
だとしたら　誰か餌をやってるだろうか
ハラがへって倒れているだろうか
生きていたら　私が帰るまで
まっててね　きっと煮干を
どっさりもっていってあげるから

卒業

とても長かった三年間
きょう目がさめた
きょう顔をあらった
きょう……そして……
三年間たってしまった

くよくよするよ、ね？
もちろん……

顔

笑っている顔
おこられている顔
おとなしい顔
あたまにきている顔
キザな顔
とぼけている顔
歌をうたっている顔
腹のへっている顔
しゃべっている顔
なやんでいる顔
ふざけている顔
くしゃみをしている顔

きれいな顔
いろいろな顔
クラスの友達の顔だ

三月二十五日　木　晴

外国へいく杏子叔母さん*を羽田空港まで見送りにいった帰り、従妹の由利果ちゃんの家に私だけ泊りにいった。

* 父の妹

三月二十七日　土　晴

従妹二人と私、おじいちゃんの四人で高島屋へいった。そこでいろいろな物を見て、レコード「月光の曲」を買った。由利果ちゃんの家に帰って来ても何もすることがなく、マンガを読んだ。明日の夕方、パパが迎えに来て、わが家に帰ることになっている。由利果ちゃんと亜里ちゃん*の二人に、とても感心してしまったことが一つある。それはテレビの見方である。由利果ちゃ

ん達はもう前々から、見たいと思った番組だけを見て、あとの時間は、日記を書いたり手紙を書いたりする自由時間に費やしていることだ。これにはとても感心してしまった。私もこれを見習わなくっちゃ。

＊　従妹

三月二十八日　日　晴

さっそく、計画表に従って生活を始めた。規則正しい中にも自由があるということは、とても楽しいことだなあと思った。

わが両親はどういう風の吹き回しか、私に洋服を二着も買って来てくれた。しかし、なんですねえ。私もやはり太ったのでしょうか、どうにもこうにも着ることが出来ない。しかたないので、あした、母上が作り直してくれるそうです。なんともはや、はずかしいことで。

きょうはご存知の通り日曜日であります。「ディズニーランド」のある日なのです。しかし、野球中継のため中止だったのです。何とまあ、くやしいことなんでしょう。

三月二十九日　月　曇

毎朝やっている「虹」というテレビはおもしろい。とくに「みどりちゃん」がおもしろい。丸い縁の眼鏡をかけ、髪は肩に垂れるくらい、ぜんぜん美人ではない。それから、テレビで面白かったのは、大学受験の合格者発表の風景——勇んで出かけていき見事合格している。その時の喜びようったらない。性格は明朗、至っておしゃべり、言っていることが面白い。夕方には楽しみにしている「南海のマイク」があるのだ。夜、クンペ*と始めた碁が病みつきになってしまい、とうとう九時になってしまった。それで今、明日になってからの後悔をなるべく少なくしようと思い、テキストだけはやった。それから「南海のマイク」が始まる前に、気晴らしに石井さん**の家にいった。石井さんはコタツでマンガを読んでいたので、私も一緒につきあった。

明日は、待ちに待った深商***の、甲子園での試合がある。竹内の投手ぶりを、早く見たいものですねえ。

おじいちゃんが、日本文学全集の中でいいのだけを、今のうちに読んでおくとよいとおっしゃった。おじいちゃんは、いま、万葉集の勉強に励んでいるそうです。

* 弟国彦の愛称　** 小学校時代からの友人

*** 深谷商業高校

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com